

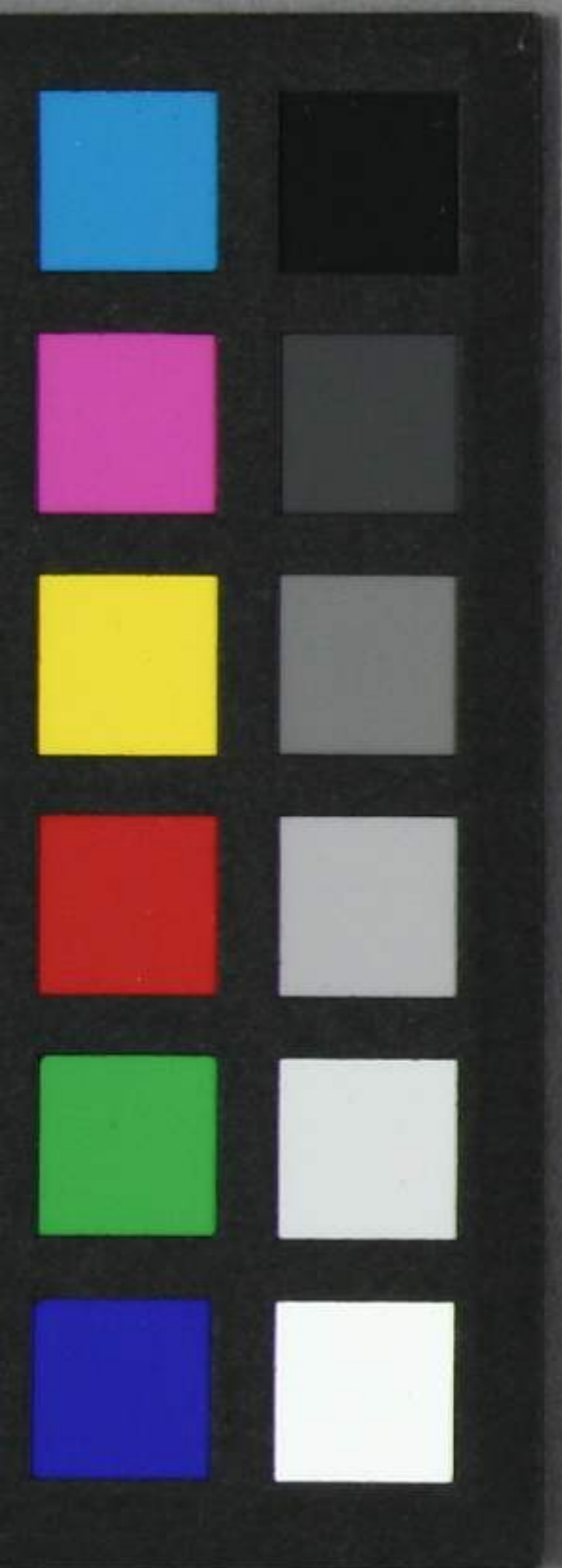
吉野 城 藩

SAYURISHU.

小百合集

東京 警 醒 社 書 店 發 兌

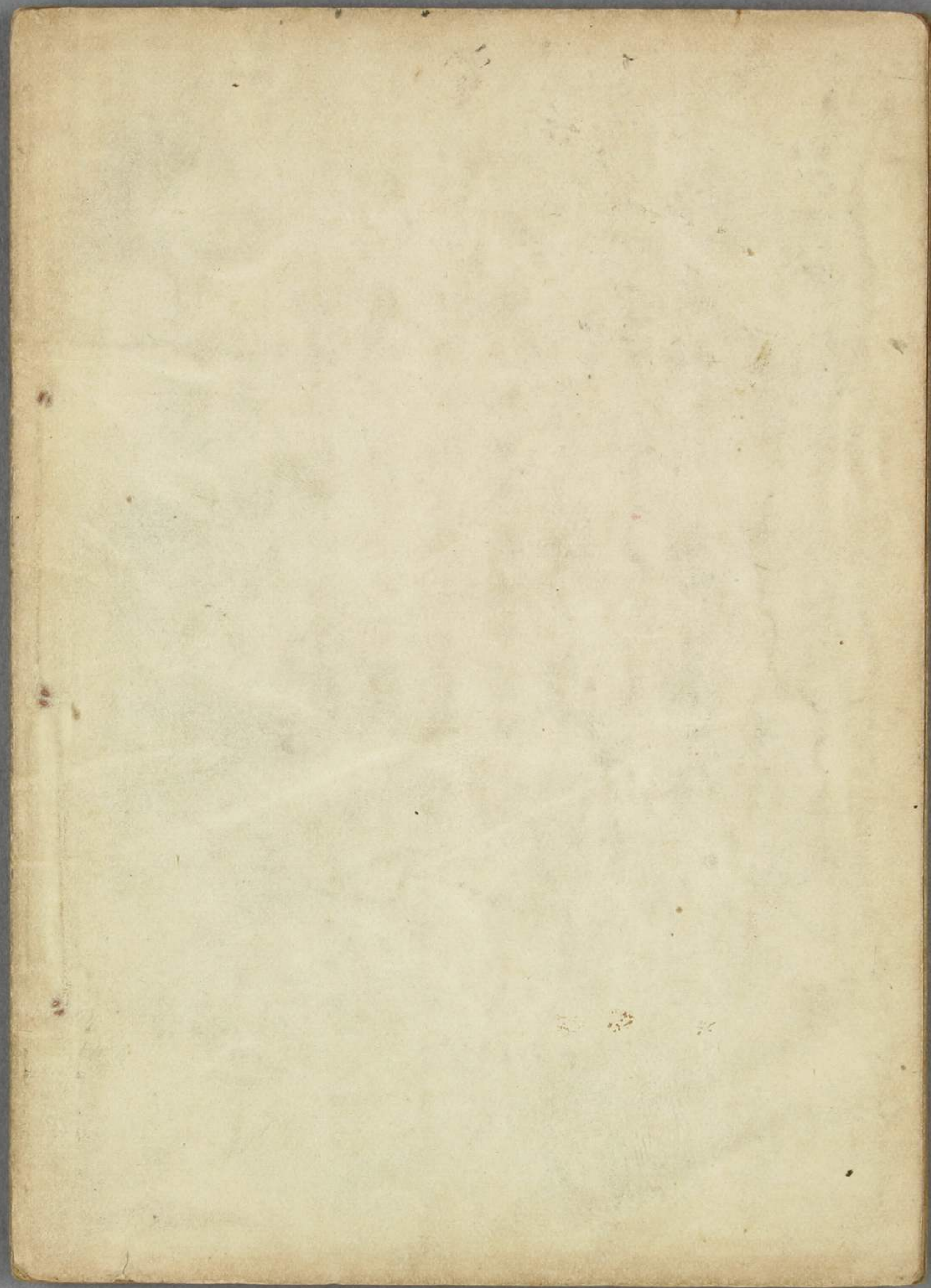
本間文庫  
文庫 14  
D 242













文庫  
D 202



文庫14  
D-112

はしがき

過ぐる二十九年頃の作より三十二年の秋ま  
での作を蒐めて、小百合集とは名づけぬもど  
よりみちのくの野の草がくれに咲ける小百  
合の色も香も浅くして、大方の目にとまるべ  
くもあらじ。然はあれど自刈り捨てむことの  
惜しさに、散りなむとする花片をあつめたる  
のみ。



二  
こを世に出すに當りて注意を與へ、且力をつ  
くされたる内村鑑三氏の厚情を謝す。  
後集は折を得て世に出すべくなむ。

明治三十四年四月二十日

櫻花さく窓の下にて

吉野臥城識す

目次

幻影……………一  
秋の歌……………六  
つきぬ恨……………一〇  
冬の歌……………一六  
花の歌……………二〇  
愛猫を葬る歌……………二四  
病……………二九  
早春の歌……………三二  
鬼の歌……………三五



逢隈川邊……………四九

晝の夢……………五四

狂犬……………五六

病夢……………六五

訣別の歌……………六六

雷の歌……………七四

蜘蛛……………八一

星の歌……………八七

廣瀬川……………九四

小百合集



吉野臥城著

幻影

風冷るに身をかすめ  
 影しづかなる夕月夜  
 野營の陣の篝火は  
 こゝにかしこにはほの見えて  
 螢火かともまがふなり



ひとり陣屋を立ち出でて  
駒の足搔あがきをうち早め  
荒野のあたりどめ來れば  
腰の劍つるぎのきらめきて  
いさゝく駒の聲もすむ

月影やとる草村の  
露の命いのちをよすがにて  
鳴くや鈴虫くつわ虫  
明日あすは馬蹄ひづめにかけられむ

今宵かぎりぞ汝なが聲も

はかなき聲をさくにつけ  
果敢はなく消かえしわが友の  
そゝろに思ひ出でられて  
草にはあらぬわが袖も  
あやしの露ぞやせりける

さきつ日敵を探らむと  
出でて行きにし吾が友は



いと勇しく戦ひつ  
死にても朽ちぬ其名をば  
この荒野にぞとゞめたる

そゝろに後<sup>うしろ</sup>みかへれば  
かなたの丘のその上に  
怪しや友は立てりけり  
われをよばふか白<sup>しろ</sup>妙<sup>た</sup>の  
ハンカチーフをうち振りて

あまりに心うれしくて  
怪しきこともうち忘れ  
駒のかしらをかへしけり  
鳴く虫の音をみだりつゝ  
あやしき友のその許に

死にきと聞くは虚<sup>うら</sup>偽<sup>はり</sup>か  
あな懐しとはせゆきて  
問はむとすればいつしかに  
消えてはかなき友の影



さては心やまをひけむ

彈丸の痕をば止めつる

松の木末に風わたり

いでそるひたる穂芒は

幾秋かけて吾が友を

月のひかりに招くらむ

### 秋の歌

秋は葎生露しげき

庵をめぐりてはゝゑめる

朝顔の香に口吸ひて

廣葉に氣息の觸るゝかな

恥しとてや朱紅を

片頬にそむる柿の實に

世のあぢはひを含ませて

一葉をさそふ朝ぼらけ



日のかげにはふ高棚に  
戀ひしゆかりの色に出で  
ふくらむ葡萄房肥ゑて  
葉分の風にふるひけり

靡きもはてぬ稻の穂の  
波のあやおる佐保姫が  
まよひの霧をかき分けて  
夢れどるかす牧笛や

山路に椎の實はおちて  
笹に聲ある日の晝に  
枝うつりする山雀の  
歡喜をしも歌ふかな

年の半なかとはすぎの戸を  
さすがさやけき夕月に  
こぼるゝ露のさゝやきは  
萩にはたれる秋の虫



いづれあはれは八千草の  
露か霜かの有明に  
老いて白髪とならむ時  
こゝに大悟さとりの光明ひかりあり

十

つきぬ恨

去年こぞの白雪残りなく  
れくや露霜消ゆきて  
風立ちかはる大空に

春の面影ほのぼのと  
うかぶ霞にけふる雨

伏屋つゞきの裏畑に  
生ふる茶の木の下枝まで  
もれぬは神の恩恵めぐみなり  
今どつのぐむ上枝はづえより  
かゝるは春の光なり

彼方の岡の八重ざくら

十一



さくと見しまに花散りて  
夏のひかりの訪れて  
若葉は四方に匂ふあり

そこに雲ゆき雲かへる  
「時ぞ」とて茶は五月雨に  
顛くゝひさうち伸べて  
若きみどりの新どろも  
かづくにあまる嘆きかき

かゝる姿を  
よそほへど  
世にも時めく  
わが身かは

この芽はつまれ  
またつまる  
幸なきわれど  
たれか知る



心も知らぬ少女子の  
戀歌畑にたねしより  
身を吹く秋の風寒く  
衣かりがね鳴く宵に  
れくは涙の露雫

せめて涙と  
さどれかし  
世をなきくらす  
われあれば

氷らば白き  
花たらむ  
色も香もあき  
冬の日の

おゆびをりつゝ待たねども  
月日の色に見入るれば  
青きこずゑはまれにして  
紅葉の山のあやにしき  
着てし少女は彼の方に



わが世淋しく咲く花の  
香あきをいとふ人々を  
恨むる色のうす白く  
ひとり開きてひとり散る  
入日つめたき夕まぐれ

冬の歌

冬の使にこがらしの  
叩きてすぐる柴折戸に

かゝる時雨の音さえて  
門の杠谷樹に愁ひあり

銀杏の霜葉黄に落ちて  
楓樹はあかく茶鼠に  
桑の葉ちりて野べ山べ  
世の寂しさも見ゆるかな

垣にかゝれる蔓草の  
いつしか枯れてその骨を



朝日に晒す下かげに  
あはれ水仙花ぞ咲く

白きは何ぞ霜消えて  
残るは花のかをりなり  
夕日には紅てくれなるに  
落つる南天色ぞ濃き

冬をさびしと誰れかいふ  
秋にさどりの光みて

こゝに名利の花をすて  
ゆきて又くるかりの聲

雪は野山を埋むとも  
松はみどり杉黒し  
枯木の枝の夕がらす  
鳴くも詩趣おもしろなからずや

仁王は寺の門の邊に  
りきみてねはす寒さにも



瘦せぬは風の聲にして  
氷は清きものあるを

きよくて濁る世の中の  
夜の巷をゆく月に  
寒しといひてむせぶあり  
春にうかれて笑ふあり

### 花の歌

花にかゝりて花にゑみ  
雨にひらきて雨にちる  
くしき心は天地の  
まよひを覺す詩なるかな

花になびきて花に消え  
雲にかをりて雲にちる  
くしきころは曙の  
まことを歌ふ畫なるかな



花にむつびて花とまひ  
蝶にかをりて蝶とちる  
くしき心は夕ぐれの  
まことを歌ふ書なるかな

花にねふりて花に醒め  
月にかをりて月にちる  
くしき心は真夜中の  
真まことをうたふ書なるかな

花に狂ひて花と飛び  
蜂にかをりて蜂と散る  
くしき心は日の中の  
まことを歌ふ書なるかな

花に迷ひて花に笑み  
風にはこりて風に散る  
くしきこゝろは天地あめつちの  
大悟さとりを開く詩なるかな



愛猫を葬る歌

二十四

あはれ強食弱肉の  
世のことわりに洩れずして  
いとしの「たま」は儂はかあくも  
あしたの星と消えしかな  
蜂蝶花に狂ふころ  
東の家に汝なは生れ  
燕子軒端を巢立つころ

西の庵に育ちにき

仇あす鼠族狩らむとて  
敏鎌とがに似たる爪をどぎ  
飼はるゝ恩を謝せむとて  
技を錬りけり真夜中に

ねびし姿に逞しく  
かしこき色もあらはれて  
にこのにこ毛に美しく

二十五



をかしき光澤もそひにけり

あゝたのもしの猫やとて

はめてたゝへていつくしみ

行末ささくあれかしと

望めることや仇なりし

愚には幸ある浮世にて

賢に幸なきうき世とか

有望の身はとく亡び

無智百歳の壽を保つ

汝はかしこき猫ゆゑに

里の魯猫に悪まれて

まだ一年もたゝぬまに

爪牙の電と失せしかな

遺恨の双齒くひしめて

閉ぢもはてざる眈まなじりに

残る涙のひとしづく



いかなる意味を寓すらむ

二十八

世は無惨なる禍津日か

運命の鋒提げて

ふるゝがまゝに斃すなり

あたるがまゝに屠るなり

浮世をかくと悟りあば

せめて恨むること勿れ

神の光にてらされて

どはの眠をもどめよや

### 病

精神五体衰へて

元氣いづくに潜ひらむ

世を罵りし舌枯れて

薬をよばふ聲ほそし

無念の双齒くひしめて

二十九



男兒をとこの眼ひかるのみ

豊頬朱唇色あせて

少女のかひな動くのみ

老はあしたの風に泣き

幼はゆふべの星にれづ

泣くもれづるも檜の實の

ひとつの生いのち命をしめばぞ

人生五十の坂こゑて

さてもうき世や捨て難き  
いまだ三四の關も經で  
すつる浮世や惜しからぬ

唯運命の手に委して

生死の道をわきかねつ

あやむ現うつどあはれある

わづらふ夢どあはれある



早春の歌

三十二

時はめぐりて風ぬるみ  
自然の吹息あたくかに  
いたりわたれば野も山も  
春の光によみがへる

霞の衣をひきまどふ  
高根は雪の肌を見せ  
緑翠をなでて流れよる

野川は琴をひきそめぬ

谷の古巢の夢さめて  
わかき希望を抱きつゝ  
にはひを辿る黄鳥は  
やさしき曲を奏づなり

冬にねぶれる奥山の  
瀧もいつしか醒めはて  
あがれの絲を繰りかへし

三十三



雄々しき歌を調ふなり

あはれ有情うじやうの鳥の曲

あはれ非情の水の歌

いづれ生命いのちをやどしたる

まことの聲にあらざらむ

まことの聲をさく時は

無我の境にさまよひて

詩神ミコトノカミの前にひざまつき

まばし美に酔ふ心地かな

鬼の歌

日月天に輝きて

星辰空にきらめきて

てらさぬ隈はなけれども

社會の暗は晴れずして

光明ひかりをよばふ聲枯れぬ



腥風颯と吹きしけば  
雲村々と立ちのぼる  
中に閃く電光の  
幽界にも通ふこゝちして  
悪あくの巷ちまたに消ゆるかな

暗いとゞしく擴ひろりて  
偽善は躍り不義わらひ  
壓制うたひ阿諛は舞ふ  
舞まにあはする法螺の音

舌のつゝみの亂調子

陽氣はこゝにめぐり來て  
咲くや黄金こがねの花ざかり  
もゆる鬼火に燦爛と  
映ずる庭の奥ふかみ  
百鬼狂ふぞすさまじき

頼光去りて九百年  
現世このよに鬼の跡たゞて



幽界にはありと聞きしかど  
見しこともなき其の鬼を  
夢からで見る怪しさよ

角あるものを鬼といふ  
それは昔のことにして  
今は角なき鬼のみぞ  
社會の暗に時を得て  
良民の血を啜るなる

見ずやつれを身に纏ひ  
笠をいたゞき鍬を負ひ  
あかつき星を踏みて出で  
三更月にうそぶきて  
家路をいそぐ農夫あり

夏の暑さも雨風も  
冬の寒さも雪霜も  
物かずかはといそしみて  
その得る所いくばくぞ



立つるや櫓の細けぶり

年貢はいよゝ重うして

穀の價は高からず

去年の負債を償ふに

家財ひさぎておほ足らず

飢寒はせまる藁の庵

地主眼を瞋らせて

鋤も敏鎌も奪ひ去り

富豪鐵拳を振りあげて

簞笥長持ちちやぶり

なほあきたらで蹴つ打ちつ

法律の力も何ならず

黄金の光ひらめけば

一夜の中に春立ちて

消ゆる泡雪をれよりも

良心早く失するなり



見ずや鐵槌ふりあげて  
 焼くるが如き爐にむかひ  
 もゆる炎の前に立ち  
 腕も折れよと生業の  
 ためにいそしむ鍛冶あり  
 花咲く春の花も観ず  
 月てる秋の月も看ず  
 朝はまだきに閨を出で  
 夜は更くるまで勵めども

とつても貧と槌ぞ泣く

課税はいよゝ重うして  
 賣る物常に高からず  
 負債は塵とつもれども  
 吹き拂ふべき風もなみ  
 妻子の飢をいかにせむ

窮乏店に迫る時  
 口に慈善を叫びたる



且那も今は聲をあげ  
暴虐の鞭うちふりて  
牛馬を御する如くなり

實にこの農夫この鍛冶  
そればかりかは日傭や  
獵師、職工、漁夫、織女  
苦痛の海にたゞよひて  
鬼火の影にわめくなり

わめくも泣くも悲むも  
馬耳東風と聞きあがし  
土を踏むよりあは軽く  
ふみ蹴散して同情の  
涙は早も涸れにけり

諂ふ花のためならば  
愛する妾のためならば  
人の豪を搾りても  
民の血汐をすゝりても



樂しとばかり思ふめり

四十六

見よ烏婆玉の雲を得て  
黄金の花の香に迷ひ  
十年とせの節をなげうちて  
政友を售り人民を  
殺すも遂にかへりみず  
あゝ人誰れか二もどの  
角あるをのみ鬼といふ

わぶらを搾り血を啜り  
權威を暗に揮ふもの  
これまた鬼にあらざるか

世に神もあり佛ぶつもあり  
善美の光明ひかりさねはてす  
なほ鬼のみにまかすべき  
怒るは誰れぞ志士義人  
魔を切る利劍つるぎこゝにあり

四十七



魔を斷つ利劍こゝにあり  
 ひとたび鞘を拂ひなば  
 正義の光皎々と  
 天にかゝやき地に照りて  
 社會の暗やはれゆかむ  
 逆手にもちてうちふらば  
 腥風とみに吹きたゑて  
 偽善は滅び鬼は死に  
 歡樂いつか生れ來て

自由の花やひらくらむ

逢隈川邊

友を携へて阿武隈河畔に逍遙す、  
 藥瓶もてる少女あり、舟を待つな  
 るべし。

白鷺わたる逢隈の  
 川のみぎはの砂原に  
 さびしく立てる少女子を  
 あはれと君はねばさずや



夕陽ゆひをうけて来る舟を  
待つ間にたぬすつく息も  
物れもひある風情ふせいにて  
しをれがちなる面わかな

流に残る夕ばえの  
色ふさわくる河風に  
柳の古葉こぼはれて  
更けにけらしあ此の秋も

希望のぞみは水とながれゆき  
世の歡樂よろこびもあぢはゝで  
沈みたるらし運命の  
鳴門なるとのくらし渦卷うずまきに

あはれ式部の智慧眠り  
清女の才もれどろへて  
自然をたふふる歌もなく  
珠をつゝるは涙なり



涙のねつる真砂地を  
ほれば湧き出る真清水に  
やどるるか星もまたゝきて  
恨はつきじ行く秋の

つめたき人の世に生きて  
さかりの時にあひもせず  
空しくなやむ胸の血を  
せめて鎮むる薬壇くすりびん

あゝ美しき鬢の毛の  
ほづれを撫づる袖口の  
紅絹もにぞさはる白百合の  
かひあも痛く瘦せしかな  
近づく舟にさからひて  
さゝらく水の音さけば  
そこに冷き調べあり  
こゝにさびしき影はあり



夕波むせぶ逢隈の  
川のみぎはの砂原に  
寂しく立てる少女子を  
あはれと君はればさずや

晝の夢

棕櫚の葉そよぐ下蔭の  
簀の子の上に三郎は  
白日の夢を見てしより

ひこどにゆきて眠るなり

あはれ晝寐は害ありと  
いひきかすれと首ふりて  
いやとよわれに益ありと  
唯すやすやと眠るなり

ゑくば傾けさめし時  
見しは何ぞと言問へば  
常世の母にあひつると



涙ながらに語るなり

狂 犬

雲を破りて走りゆく  
月の光を背に浴みて  
風のそよぎに立ちどまり  
塵のすさびにうち狂ふ  
犬の聲聞け悲みの

情を知らぬ痴ものが  
答ふりあぐる夕まぐれ  
ちるや快樂の花ふいさ  
たちまち迫る苦痛の  
嵐に堪へぬこゝろかな

肉一片を手にのせて  
呼ぶ聲にくし虚偽の  
笑窪の中に毒もりて  
欺き殺すたくみぞと



知るかあはれの犬の子よ

倚たのみ頼たのみすくさき世の中の

権家の門かきに尾を掉りて

露のさかぬに生きむより

狂はゞ狂へ吼なば吼な

うき世の暗を破るべく

あるも幸きりなき身なれども

うちすてかねし精神せいしんの

片時世をばわすられず  
湧き立つあけの血を吐きて  
叫べよ不義を斃すべく

あした荒野の末に吼え

貴族の衣きぬを裂きし齒の

ゆふべ甘味あまみをかみしめて

伏屋の夢を破るてふ

狸に似たる狗を刺せ



都大路の春の風  
吹くや輕羅の袖に香を  
包みて走る馬車に觸れ  
泣く子を乗せて情なき  
人のうなじを噛めよかし

巷の柳秋見ぬて  
古葉こぼるゝ朝ぼらけ  
鍬を荷ひてとぼとぼと  
歩む老翁を追ふなかれ

まどふ縊縷の見憎くも

露をはなるゝ蜻蛉の  
よるべ菜畑の花陰に  
ひそむ蛙を蹴散らせよ  
告天子の雛の血を吸ひて  
さまよふ蛇の腹を裂け

狂ふといはば狩りたてむ  
誠を知らず義を知らで



餌をむさぼるけだもの、  
 牙を鳴して逼るとも  
 あゝその腰を折る勿れ  
 餓ゑて其の身の細るとも  
 しばしは忍べ義の爲に  
 よしや渴きて堪へずとも  
 汚れし水を飲むなかれ  
 死の神ねらぶ時の間も

大路の橋におり立てる  
 狐が虎の威を借りて  
 自由の民に干涉の  
 しもどをあつる右<sup>め</sup>手を打ち  
 よるめく足を碎けかし  
 かへるや主婦にさいなまれ  
 夕ぐれ寒き里川の  
 風にイむ子<sup>こ</sup>守<sup>もり</sup>女の  
 あはれを外に吼<sup>こゑ</sup>つくな



小兒の夢もさむべきに

六十四

とても甲斐なき世と知らば

胸にひめたる革命の

聲をしぼりてかけめぐり

虚榮にはこる股を噛め

罪なき人を救ふべく

かまれしものゝ狂ひ死に

噛まれぬ人の長らへて

光明をよばふ聲の中  
希望の影のうかびあば  
汝の狂も癒ゆべきか

### 病 夢

病みて眠に入りし時

こひしき人に逢隈の

川瀬の月に舟うけて

わづかに語る吾がおもひ

六十五



さめて病にあやむ時  
こひしき人のおどづれて  
ひたひに觸るゝ手を握り  
物をもいはでわれ泣けり

訣別の歌

今故郷を去らむとす  
かへり見すれば臥牛城  
影は消ぬゆく風の外

僅に招く氏神の  
恨は長し杉のうれ

唯縁なる何處にか  
門の柳はしだるらむ  
その下蔭にさらばとて  
をしむ涙を父母の  
わかれの袖に兄弟の  
包みし影よ何處にか



あゝ止めむとは思へども  
といまらなくに軌り行く  
この小車をいかにせむ  
心ぞ弱きためらはい  
時は過ぎなむ「汽車の時」

幾年こゝに熱涙を  
濺ぎてつくす精神を  
知るものしなき悲しさは  
心にひめて世の人に

うち洩さでもありぬべし

あしたに阿媚を東に  
ゆふべは節を西に賣り  
虚榮を誇るけだものゝ  
尾をふるさまに唾して  
蹴るに堪へむや骨なきを

沼にたゞよふ浮草の  
定めはなしと聞きつれど



それにも劣る男子をのことは  
われ物いふを好むべき

朽ち腐れしはそのまゝに  
置けよあまあか手をつけて  
わが身を汚す愚をなすな  
若しも濁れる水ならば  
また澄む時のありもせむ

遮さしあらわれ莫なはこりがに

われ清しとにあらねども  
抱ける主義は唯一つ  
うき世の人と合はずとて  
争で折るべき此の腰を

あゝ天そら高し地つち廣し  
仰ぎて俯して恥ぢめやは  
神より受けし身の幸を  
ひとり祝ひてほゝゑみて  
主義に死ぬべき運命さだめかど



思へば慰むすべもあり

思へば慰むすべもあり  
故郷人はみづからが  
處世の才に疎くして  
地位を得ぬを笑ふとも  
わらふ心にまかせてむ

富は「草葉にれく露」の  
遂に消ゆべき光ぞと

知らぬ利慾の徒輩に  
眞理を説くも石像の  
聞くべき耳のあきかぞと

人の嘲笑も何ならず  
主義を抱きて主義のため  
いま故郷を去らむとす  
かへりみすれば臥牛城  
汝は惜むか知己の身を



わづかに招く氏神の  
恨は長し杉のうれ  
さらば別れむをしへ子よ  
噫まさきくであれよかし  
心の眞珠まじまみがきつゝ  
さらばわかれむ故郷よ  
又逢ふこともあるべきに

雷の歌

一たび聲をはりあげて  
黒雲招き雨呼べば  
天地は震ふ時のまに  
たのしき風の満ちしかな  
東に西にかけめぐり  
南に北にとゝろきて  
毒氣を拂ひ魔を斃す  
叫びは似たり革命の



雲に閃き氣をとほす

その電光の走る時

暗は迷は破られて

しばしはひそむ悪の聲

魔をおそれざる世の中に

避雷の柱かず増せば

うはべにかざる文明の

衣は不義の裏の色

法律は弱きを縛る繩

強きはいつか遁れ出で

眞晝にふるか怪力も

挫くに足らぬ淺間しさ

佞奸邪惡はびこりて

人の血を賣り舌を售る

黄金は隨喜の光にて

阿媚はさかぬの花にして



かれ時めきし眞ごゝろの  
 利劍つるぎは匣の底に鳴る  
 雷のひゞきに電光いなづまに  
 血汐のくもり拭はむか  
 たちまち疾風はやて峰に湧き  
 光轟音とどろきすさまじく  
 青葉ぞ狂ふ中空なかぞらを  
 吼えてたばしる雨あめの脚あし

軽車馳せ行く道のべに  
 ををりを洗ふ水狂ひ  
 早ひでりをかこつ小山田やまだに  
 めぐみの雫あふれたり

魔の住むところ玉樓に  
 震ひはためく雷の火や  
 罪をかさねし奸物の  
 さかむをやきぬ悉く



いくその毒を世に吐きて  
蒼生を悩ませ害ひし  
をろちの潜む杉森に  
落ちてたふしぬ残りあく

紅塵とみにをさまりて  
汚れ苦み流れ去り  
楽しさ、清さ生れ来て  
野山に満てり歡喜は

あゝよろこびの聲の中  
革命よびしますらをは  
はれゆく空の白雲と  
虚名を捨て、隠れけるかな

蜘蛛

五月雨はれし夕ぐれの  
蜘蛛のふるまひ汝見ずや



軒より竹にひとすぢの  
絲引きはへて縦横に  
張るやいくすぢ白絲の  
網はなりけり精巧の

勉めておらぬことやある  
まいて享け得し其の技を  
揮へば奇しや幾角の  
形おのづとそなはりて  
さも清げなる住家かあ

何を目的の住家ぞと  
かつは怪む彼方より  
吹くや夕風さらさらと  
渡ればかゝる蛇ひとつ

蛇はくるしむ網の中  
蜘蛛は勇みてふりあぐる  
利器にさしもに暴虐の  
舌をふるひて民の血を  
吸ひたる彼れも斃れたり



さすが光明ひかりをはづらひて  
葉裏にひそむ毒蝶の  
暗にまぎれて舞ひ出でむ  
罪の翼のあへなくも  
鋭き爪に刺されたり

時に罪なき蜻蛉かげろふの  
網にかゝれる蚊を追ひて  
生命いのちを隕くだすことあるも  
さよきこゝろは神を知る

げにおもしろの蜘蛛の巢や  
この世のさまを飾りなく  
うつす鏡にあらざるか  
あらず醜き毒蝶の  
暗に時めくごとくにて  
血を吸ふ蛇のわがまゝに  
雲にとび入り草に舞ふ  
たれか夕ゆふの蜘蛛くもと寄り



正義の網を世に張りて  
偽善を斃し不義を刺す

壓制つゞく五月雨の  
霽るゝや雲のちりぢりに  
裂けて自由の夕光  
かゝやく空によるこびの  
聲のどろくその時を  
おもへば堪へぬ涙かき

星の歌

あゝ茫々の昔よより  
夜の御空に咲き出でて  
幾春秋の雨風に  
散ること知らぬ星の花

暗六合を襲ふ時  
姿も清くあらはれて



愛の光をふりまけば  
情に渴きて苦める

世の人皆は仰ぎ見て

慰籍の眉をひらくかな

雲に隠れて雲を出で

丈夫を守る星もあり

明皎々とかいやきて

四海をてらす星もあり

水漾々と流れ去る

ナイル河畔のダミエット

踏みにじりたるますらをは

凱歌をあぐる聲の中

感謝さゝげぬ神の星

歐土の風を叱咤して

鐵騎の走りゆくところ

草木もなびく勇將の

頭上に高く輝きて



みちびく星の光あり  
人には見ぬ影なれど

あはれ其の星今いづく

空に無数の星ありて

永久とこほの光彩美しく

照れど名あるはまれらなり

北辰つねに北を指し

蒼浪萬里太洋の

潮をわたる船旅の

道のともしど仰がれて

名は群星の上にある

金星光あきらかに

明暮あきくれ人をさどすど

西に東にあらはれて

まだたく時に涙あり

星もなげくか人知れず



聲なく落つる一雫  
下界の花の朱唇に  
おきては露の珠となり  
はかなく消ゆる習ひかき

花は下界の星にして  
星は御空の花なれば  
天と地とに生れたる  
姉妹どとは歌へども

妹の花はうつくしく  
匂ふといふもひとさかり  
姉ある星は永久の  
希望の上に開くなり

あゝ永久の星の花  
たれか匂を慕はざる  
あはれ希望の星の影  
たれか光を仰がざる



廣瀬川

序

風にうちふす故郷の  
草を出でたる身はひとり  
五城の雲に入りくれば  
あがれは清し廣瀬川  
底のさざれに水澄みて

岸の真砂地露ふくみ  
あしたは動く雲の色  
ゆふべは宿る星のかげ

岩根をわたる翡翠の  
歌に静けき快樂あり  
名もあき花に少女子が  
神秘をひらく姿あり

想は沈み筆重く



罪なき紙をやぶる時  
 讀むに懶く氣は倦みて  
 眠のわれを襲ふ時  
 虚榮をとりを嘆き世を泣きて  
 心の波のすさぶ時  
 やどりを出でて徜徉さまよへば  
 胸にさゝやく水の音  
 流を遠くながむれば

かすかに神の琴を聞き  
 平和の光かゝやきて  
 憂愁うれひも空に消ゆるかあ

其の一

朝まだきに散歩すれば、流に臨みて、網を  
 おろす童あり。

曙白く星消ゆて  
 風ふきわたる川面に



影を落して唯ひとり  
響をおろすわらはべよ

清瀬さばしる鮎の子の  
快樂を思へ人の世の  
苦きを盛れるさかづきを  
含みてわれを泣かむより  
まどふつゝれの胸の上に  
心の光かゝやけど

眼はくぼみ髪まゆのびて  
姿もいたく瘦せしかな

又と語るな悲しきに  
父、無き罪にねとされて  
母は病にうめくどよ  
げにもあはれの身の上や

見よ岸のべに開きたる  
花に情なさけのあるものを



人に涙の涸れ果て、  
例令現在につらしども

至誠の道ぞ寶なる  
虚偽の巷を行く勿れ  
心の力折るあかれ  
神は守らむ汝が身を

習をあげよ細鱗は  
網にかゝれり嬉しげに

清き尊き手によりて  
捧ぐる犠牲になりならむと

其の二

午熱のはげしきに、焼けたる砂の上をふ  
みつゝ砂利さる女あり、車を曳くは夫に  
やあらむ

深緑の蔭に香を探り  
風のしらべに慰みて



廣瀬の川をどめ来れば  
心のうさもはれにけり

岸のこなたを見入るれば  
春に波のめく陽炎かきの  
それかどばかり燃え立てる  
中に砂利とる女あり

こぼるゝ汗は真砂地に  
露ともれかず消ゆるけど

暑さも忘れ身もわすれ  
黒きかひなを揮ふかな

柳の枝を背にさせる  
男子が曳くや小車こぐるまの  
轆なげを止めて見かへれば  
女はねもをあげにけり

「日に焼けたりや汝が顔の」  
「黒くなりしよ君が頬の」



「瘦せにけらしな汝が影も」  
「細りけらしな君が身も」

「汝と二人ふたりしあるなれば

いかなる業わざもいとふべき」

かたみにそゝぐ愛の雨

わらふや清き百合の花

名利ほまれを俗にもとめねば

心にかゝる雲もなく

虚榮ほまれを人にはほこらねば  
胸をいたむる風もなし

あはれ床しのなからひよ

幸多きかないもとせよ

自ら動きはたらきて

生活くらししゆくこそ尊けれ

人は暑さを避くといふ

身の苦しさを何とせむ



知らずや夏の涼しさは  
心の中にあるものを

其の三

初秋のころ澱橋頭に立ちて獨吟す、露よ  
りのぼる月の夕

夕日うする、彼<sup>かなた</sup>方より  
野こゑ山こゑ走り來て  
秋<sup>あき</sup>姫<sup>ひめ</sup>さそふ初風の

すゝし澱の橋のうへ

露よりのぼる夕月の  
光をいまぞますかゝみ  
研ぐに肖たりあ<sup>もの</sup>萬象<sup>みな</sup>の  
清くうつらぬ方もなし

ながれにをどる腹赤の  
くしき響におどるけば  
黄<sup>こがね</sup>金をちらす水の面に



細かき波紋を織りてゆく

きよきは水の心かき

清きは月のひかりかき

濁るは泥のあればなり

曇るは雲のあればあり

心のきよき真砂地に

真と書ける文字を讀め

迷の雲をれしわけて

すめる善美の光明にて

仰けば虚空は高くして

神秘をかたる星のかけ

耳をさませば草村の

虫のしらべも清きかな

### 其の四

肥馬を清流に洗ふ兵士あり、その淺黒き



おもわには無限の憂愁をたへて、砂上にうつる影さへいたく瘦せたり

夕日かたぶく兵營の

喇叭は清し廣瀬川

流に馬を追ひ入れて

鬣撫づるつはものよ

それは愛馬が強兵を

口にとちへて民の血を

搾りて得たる虚榮を

胸にかざれる將軍の

尻尾を拂ふ秋風に

四足を立て、夕雲の

光をにらむ瞳より

電光とばす力あり

耳そばだて、嘶けば

いはほに咽ぶ水狂ひ

をせれば野べの夕嵐



草木も靡く風情あり

流にうつる汝が影の

細き姿にくらぶれば

むべ肥えたりな逞しく

そあはる威勢れのづから

悲むなかれつはものよ

故郷遠き妻も子も

國のためぞとあきらめて

野山に鋤をとるものを

靴に蹴られてなぐられて

これが天晴義務ぞとは

似非愛國のいふどころ

よしや心に堪へずとも

羨むあかれ馬の身を

肥えたりとても何かせむ

鬣とりて追ひあげよ



しばしの休息やすみ與ふべく

流を見れば浮び来る

花に眠れる蝶ひとつ

如何の秘密抱きつゝ

夢より夢に瘦せにけむ

思へば堪へぬ涙かな

つはもの瘦せて馬肥ねて

一將榮はの萬骨かれて

あゝそれ國の起つべきか

民は疲れて野は荒れて

伏屋ふせやの烟うするゝに

ひとり將軍馬肥ねて

西風そゝる身にぞしむ

暗吹きおくる夕空ゆふぞらに

聞けよ喇叭の悲しきを

彼れも責苦せきに身は瘦せて



280

故郷のみや慕ふらじ

百十六

さゆり集終

明治三十四年七月二十五日印刷  
同 三十四年七月二十八日發行

◎△△△◎  
定價拾五錢  
◎▽▽▽◎

著者 吉野甫

發行者 福永文之助

東京々橋區采女町二十四番地

印刷者 村岡平吉

横濱市太田町五丁目八十七番地

發行所 警醒社書店

東京々橋區采女町二十四番地

印刷所 福音印刷合資會社

横濱市山下町八十一番地

複製  
不許



廣告

內村鑑三君譯

○英和對照愛

吟

(新体詩歌)

定價十五錢

郵稅二錢

池亨吉君著

○淚痕集

定價七十五錢

並五十錢

150